

こころ日記「ぼちぼち」 その③

脇野 千恵

最近気になること

不登校といわれている子どもたちの支援を始めてもう6年になる。各行政では、学校へ登校できない子どもの居場所を設置している。先ごろ、不登校がぐっと増加したとメディアも伝えていた。そういえば身近な近所の孫世代の不登校の話は、普通になっている。もう誰でも不登校になる、そう思ってもいいかもしれない。

今、学校現場から聞こえてくる困りごとに、いじめからの不登校という事例ある。

人との関係において、いつも対等とは限らない。楽しいこともあるがいやなこともある。その経験を繰り返すことで、子どもは少しずつ交渉術を身に付け、たくましくなっていくのだと思うが、どうも今の子どもたちには、当事者同士で話し合い解決する力が育っていないように思う。



中学3年生のマコトは、バスケットが大好きだった。地域のクラブチームに所属し試合ではレギュラーとして大事な試合には出ることができた。高校進学は、スポーツ推薦をねらっていた。クラスの中では、友だちとはそこそこ仲良く過ごし、生徒指導上の問題もなかった。

同じクラスにサキという子がいた。サキは、クラスでは目立たない生徒。休み時間は一人で本を読んでいることが多かった。

マコトとサキは、実は幼稚園の頃からの友達同士だった。互いの家も近く、いわゆる幼なじみとっていいだろう。小学校でも同じクラスになったことがあったし、中

学3年になり、また同じクラスになった。互いに学校では、会話をするのではないが、二人の唯一の共通の話題は漫画だった。時々、互いの家に行き漫画を見る関係だった。

ある日、サキが体調をくずし学校を休んだ時のことだった。マコトは、サキと家が近いこともあり、担任からの連絡プリントを届けに行くことになった。

「そうだ、借りていた漫画も返しに行こう」

マコトは、また違う漫画を借りたいとも思っていた。インターホンを鳴らすと、今まで横になっていただろう恰好で、サキが出てきた。彼女一人で留守番をしていたらしい。連絡を届けに来たことと漫画を返しに来たと伝えた。玄関先でのマコトとサキの話は弾んだ。

何を思ったのかマコトが急に、「サキの胸見せてえや」と言った。

サキは、何の否定も抵抗もなく、自分の胸を見せてしまった。マコトはそれ以上のことは要求せず、漫画を借りて家に帰った。

え？性加害、性被害？

そのことがあって一週間後、サキは保健室で休んでいた時に、保健の先生にマコトに胸を見せたことを打ち明けた。

サキは、その時は何気なく胸を見せてしまったけれど、何かもやもやした気持ちになり、誰に話せばいいのかわからず悩んでいたと言う。そして、同じクラスのマコトの姿を教室で見るのが辛いとも打ち明けた。

保健の先生は、本人の同意を得て親に連絡をすることにした。母親がとても驚いたのは言うまでもない。しかも小さいころからよく知っている子によるいたずらに、



ショックを隠せなかった。

もちろんマコトの親にも伝えられた。学校では、この事件？をどのように扱えばよいのか話し合われた。

学校外で起こったことだが、同じクラスの生徒同士であることが大きな問題となった。とりあえず両者の親の同席のもと、謝罪の場が持たれた。性加害生徒となったマコトは、サキに謝ったものの、実は事の重大さを受けとめられずにいた。

サキの不登校

やがてサキは、教室に入れなくなり不登校となった。

サキの母親は、

「性被害生徒である自分の子が、なぜ不登校にならなければいけないのか、納得がいかない！」と学校に訴えに来た。

サキの親の要求は、性加害生徒であるマコトを別室に入れよとのことだった。学校は、同じ教室にマコトとサキがいることは、やはり良くないと考え、しばらくマコトを別室で学習をさせることにした。

マコトの両親は、しばらくなら仕方がないと覚悟を決めた。しかし、学校での部活も止められ、進路のことを考えるとこの状態がいつまで続くのかと、怒りの矛先を学校に向けるようになった。サキがマコトのいない教室に入るようになっていたのも、気に入らなかつたのかもしれない。

どちらにも学習を受ける権利があるのだと考えると、その方法が果たしていいのか？と、考えてしまった。

子どもたちが小さい頃は、親同士のコミュニケーションもできていただろう。このことから、互いにゆがみ合う仲になってしまい、高校への進路にも影響し、マコトのバスケットへの夢は遠のいてしまった。

性を人権として捉える

性加害は絶対にいけないことだが、マコトは、女の子からだに興味があり、親しいサキだから見せてくれるだろうと思ったのではないだろうか。そう思ったとしたら、とても幼い子がする行動だなと思う。

だから小さい時からの性教育が大事なんだとは言わないが、教育の中に何か抜け落ちていたことがあるのではないかと考えてしまう。

このような事例は、実は最近よく聞く。保育園でも、カーテンに隠れて互いの性器の見せ合いっこをしていたとか、上級生が、下級生に性的ないたずらをするなど、いじめの中で性的な行為が含まれている実状がある。

子どもたち同士で、なにげない遊びの中で起こった事故が、大人が介入することで、被害者側、加害者側に仕立てられてしまうことがよくある。そこには、子どもの気持ちが不在になり、大人同士が炎上してしまう昨今の事情がある。本当に残念だなと思う。

マコトとサキのように住む家まで近いと、相手に引っ越しを要求したりする事例もある。また裁判という場に連れ出されることも珍しくない。

当事者同士の解決

先日、家族理解プログラムで、「当事者同士での解決」という話を聞いた。私が子育てをしているときは、近所同士のコミュニティがあり、子どもの様子を、悪いことも良いことも伝えてくれる人がいた。本当に有難いなと思っていた。

子ども同士がけんかをしていても、できるだけ口を出さず、最後まで見守ることを大切にしてきたようにも思う。

何事も、第三者を介入させなければ解決できない社会、人間が益々弱くなっていくことがやりきれない。



つづく